



按するに、右貫珠軒も虚直亭と同じく、別墅なる離亭ならんか。此の別墅は、そのかみ民部近義老名信齋の養老所にて、従前はその園内甚だ廣く、大なる堀などありて、奇巖怪石多く、樹木生茂り、甚だ古雅なる苑地にて、風景殊に佳なりき。且つ二百間の調馬場あり。此の馬場は宮腰の方へ向ひて其の左側に、巨大の松生並びたり。往昔宮腰古道の往還なる並木の松なりといひ傳へしかど、廢藩の後悉く伐取り、今はなしとぞ。又鶴井と呼び來れる古井もありといへり。明治廢藩置縣の際、高岡町の本邸を退去して、此の別墅を居宅とし、爰に居住せり。

○二王堂

此の二王は石像にて、昔より今枝氏下邸別墅の庭内にありしかど、廢藩の後、今枝氏此の別墅を居住所となして、家作ありし時、居所の入口へ出し、堂宇を建て安置せり。此の二王の來由は不詳。甚だ古作なれど、たゞ一軀あるのみ。一説に、元は小松城内にありといへり。従前別墅内にありし頃は、毎年三月廿八日・八月廿八日を二王祭とて、子供など庭内へ入る事（忌）許し、近方の人々參詣せりと。其の

頃は入口に碑石を建てたり。碑面に、此奥靈驗二王有と云ふ七字を彫刻せり。此は室鳩巢翁の筆跡也と云ふ。今此の碑を二王堂前に建てたり。右二王の來歴は不詳といへども、往古此の地邊に大寺ありし遺像ならんか。廢藩の後別墅の庭内なる堀を埋めんとて土を取りけるに、土中より大なる切石に利益の二字を彫刻せしものを掘出せり。是も二王尊に屬せし遺物ならんかと云ふ。今二王堂の前に、古き五輪石の如き石などを置けり。皆そのかみ庭内にありし古物なりとぞ。或は云ふ。今枝氏の元祖は、江州日枝山の開基にて兄弟ありしが、日枝の二字を分ちて、兄は日置と稱し弟は今枝と稱す。日置は備前岡山の藩士と成り、今枝は加州の藩士と成り、兩人日枝山の二王の古像を一軀宛分けて持來たりしなりと。右二王は、京都白川石にて彫刻せし石像なりといへり。按するに、今枝氏系譜に、傳曰。濃州有稱梁九郷者。元祖某移於是。住今枝郷。其末裔次郎丸。初稱今枝。八郎左衛門三世祖也。と見ゆ、また八郎左衛門が傳中に、或時及深更。獨過小燈。暗夜不辨東西。道側有人。其長甚高。乃拔刀擊焉。果首落地上。翌日到彼所視之。

石地藏竝立。而牛頭亡失。其割最平。漸尋求牛頭於叢中。因茲號其刀曰地藏丸。といふことは見わたれど、二王の事はなし。過聽の俗談なるべし。

○金子有斐傳

墓碑記に云ふ。先生本姓南保。諱有斐。字仲約。號鶴邨。稱吉治。其先越前人。傳言。世爲朝倉氏之臣。譜牒散逸無考。其世系八世祖。曰茂暢。文祿中來居于大聖寺。山口宗永之亂。逃隱于山中邑。其子諱茂義。幹邑中温泉事。後遷于鶴來邑。因家焉。有故舅母姓金子。始貫農籍云々。先生學於京師。乃從皆川淇園學。學成歸焉。寬政初。小松城市幸某與先生謀創郷學。名集義堂。獎先生爲師長。購授者有年矣。滿城翕然仰其教化。嘗制釋菜奠祀先聖。至今一遵其儀。文化紀元。應今枝大夫聘爲儒臣。來于金澤城。先生幼而穎悟。甫七歲識字。強記絕倫。一入耳終身無遺忘。爲人簡易質篤。不以嗜欲營心。無爲恬淡。顏色無喜愠。居母喪哀毀過禮。晚好講易及老莊。詞吐朗暢。聲氣如流。聽者超然心悟。善書。南北二宗之外別爲一派。天保二年六月致仕。年七十有三。猶有壯容。其風逸如僊。大夫優待特厚。及其老。每